

第9期県民生活審議会第3回総合政策部会（概要）

1. 日 時 平成24年12月27日（木）14：00～16：00
2. 場 所 パレス神戸 大会議室
3. 出席者 委員：鳥越会長、加藤部会長、浅倉委員、井原委員、木田委員、北野委員、小西委員、佐藤委員、田端委員、野崎委員、速水委員、古谷委員、山口委員、山下委員
県側：山内政策部長、横山県民文化局長、手塚県民生活課長、竹村協働推進室長、久戸瀬副課長、赤松主幹、土屋主幹、有吉補佐、永園係長、県民局ほか関係職員

4. 内 容

(1) 政策部長挨拶

- ・ 本日はこれまでご議論頂いたことを元に、家族のつながり、地域のつながりを念頭に置きながら、地域を、県民一人ひとりが責任と役割を果たせる場にするにはどうすればよいかを「ふるさと」をキーワードに提言案を作成した。
- ・ 今後は2月に政策委員会を開催し、3月に全体会で最終提言案をお諮りしたい。
- ・ 本日は忌憚のないご意見をお願いしたい。

(2) 資料説明について

- ・ 事務局から資料1～4に基づき説明

(3) 意見交換等

<ふるさとづくりの定義>

- ・ 都市化や家族が弱くなったこと等から、人々の拠り所が無くなっている面がある。“ふるさとづくり”というのは地域レベルで拠り所を探そうという考え方。
- ・ 前期で孤立について扱った事を受け、今回は人々が何を拠り所にするかという議論をしている。提言では、家族が一つの拠り所であるとしっかりと言いつつ、拠り所になるものを地域社会に作ろうということ、を、「ふるさとづくり」の中で言おうというのが基本的な発想。
- ・ 提言で問われているのは「新しい人間関係」ということ。「ふるさと」という言葉では表しがたいのではないか。
- ・ 提言の「ふるさとづくり」の概念は、脱工業化など多様な動きの中で、集団からネットワーク系へという大きな変化の中、家族とコミュニティを見つめ直そうということが出てきた。「ふるさとづくり」というのは過去に戻るのではなく、新しい時代にあったコミュニティの定義なんだということを確認することで、方向性が見いだせると思う。

<「ふるさと」は住み続けている人だけが持つものではない>

- ・ 地域のキーマンは、一度地域を離れた人が結構多い。退職して戻ってきた時に、外からの視点で地域を見直すとアイデアが出てくる。「ふるさと」というとずっと住み続

けている人のイメージが強いが、帰ってきて何かやる、ということが提言に書き込まれると面白いのではないか。

- ・ さらに言えば、社会の流動性が高まる中、新たにやってくる方、一時的にそこにいる方も増えていくと思う。
- ・ 「ふるさと」というのはあくまで拠り所の意味であって、生まれてから死ぬまで居る人だけがふるさとに関わる訳ではない。

<ふるさとづくりの受け皿>

- ・ 問題は拠り所の受け皿。小学校区より小さな自治会などから、中学校区、市町村単位なども考えられる。テーマによってそれぞれの受け皿が違うという発想なので、一般的な話にならないためにも、受け皿の姿が示せばよい。
- ・ 今までは小学校区をコミュニティと捉えて、県民交流広場事業などの施策を行ってきたが、東日本大震災の発生や時代状況が変わる中、過去の否定ではなく、それを踏まえて新しい方向性を示すのが我々に課された課題。
- ・ 社会の要求する質が高くなりガバメント（政府）だけではガバナンス出来なくなってきた。その結果、各主体が対応せざるを得なくなっており、それを今、私たちはコミュニティと呼んでいる。
- ・ 市町村や県もコミュニティの中で大きな役割を持っているアクターとしての存在であると考えられる時代にある。
- ・ コミュニティは小学校区と捉えて考えてきたが、それよりも小さい自治会レベル、大きい市町村レベルがあってもよい。市町村範囲のコミュニティでは行政と協力してという側面が必要。

<ふるさとづくりの4つのキーワード>

- ・ 「多様、柔軟、自立、創造」という4つのキーワードがあるが、みんなが同じようにこのキーワードを重視する必要はないのではないかと。とりあえず自分たちで決めるというのだけがポイントですよ、くらいで良いのではないかと。
- ・ 「多様」「柔軟」「自律」「創造」とは「同質」「固定」「依存」「踏襲」という大きな岩を動かすための方法。岩の動かし方は多様であろうという意味だと思う。
- ・ 「多様」「柔軟」「自律」「創造」をキーワードにしながら、具体的にどうするかといった時、意見に出たのは、「話し合い」と「体験」。これらを縦軸と横軸とした論理を構成すると良いものが出来るのではないかと。
- ・ これからは「多様」ということをベースにしていってはどうかということ事務局との打合せでも議論していた。このあたりを地域にどうやって埋め込んでいけばよいかという所だろう。

<家族のつながりを見直す>

- ・ 家族の復活から、向こう三軒両隣の復活。これがふるさとを残すための施策。
- ・ 県民の意向や地域住民の意向は、まだ世帯単位。その中で子ども、高齢者、女性の意見をどうこう言うのはおかしい。一人ひとりの調査をしないと、世帯単位では見えない

くなる。

- 家族を形成しない人が増えたり、血縁関係が無くても家族を形成する、ペットも家族であるなど、かつての社会とは異なる多様な状況を抱えている中、ご意見にもあった通り家族を新しい人間空間として捉え直す時が来ていると強く感じた。
- 一般的に家族というと集団を意味するので、個人と家族の関係は提言の中で整合性を持たせるためには、書き分けるしかない。「家族的なつながり」とすると、「家族的」というものへのイメージが多様なので、「親密で多様なつながり」と表現したい。
- 「お互いさま」「おかげさま」の関係が迷惑な事もあるので、文章の趣旨に添った言い方にするなら、「個人の自立を土台として気軽に世話になったり世話をしたり」という「気軽に」を入れると良い。
- (1) 2つ目の*は、集団としての家族に限定しているので、「家族のあり方を」は、「家族の支え合いの大切さについて」とし、なおかつキーワードを入れて、「柔軟かつ創造的に考える必要がある」と続く文章の方が良いと思う。
- 「バラバラではなく、かと言って、しがらみにもならない程度の強さの」と書いてあるが、ここは集団の家族というより、家族を形成しない人や離れて住んでいる人たちを書いているので、ここを「その人の状況に応じて」と書くのはどうか。
- 「向こう三軒両隣からの重層的なつながり」には、個人や家族を尊重するというニュアンスの言葉を入れて欲しい。
- P 1 2からのところは、家族を言う時に、「個人」も入れると広がりが出ると思う（例えば「家族を支援」は、「個人や家族を支援」とする）。「個々の家族や個人」は逆にして、「個人や個々の家族を結び合わせる」とする。
- 単身家族というのはいり得ないのか。死別・離別で単身になるが、それは家族とは認められないのか。
→家族は集団概念ではなく、単身世帯もちろん家族である。家族とはネットワーク概念なので、どうやって住んでいるかより、どこにどう繋がっているかというのが重要。

<「体験」が大事>

- 青少年団体で調査している結果にも現れているが、体験というものは大事。体験の場が減ってきており、体験より学力という親が多い中で、意識をどう変えるかが大事なポイントである。
- 自然にふれあってない子どもでも、ふるさとの自然というのは子どもの意識にある。これを大きく育てることがふるさと意識の将来を考える時に大事である。

<合意形成の仕組みづくりが重要>

- 合意形成とは難しく、「受け皿」とはそういうものではないか。声の大きいものの意見が通るのではなく、誰が軸となって、どんな場を用意するのか、みんなが参加しやすい場なのか考えながら、みんなの意見が吸い上げられていく仕組みというのは難しいが大事に取り上げ、考えなければならない。
- 具体的にしくみづくりのご提案はないか。

- 会議形式の場で話をするのは難しい。「場の持つ力」というものがあるので、場所を選ぶのと、ファシリテーターのような立ち位置の人が話し合いを進める事がポイントである。
- 公がやるとその公共性や公平性がネックになり、前へ進まないことがある。つなぎの場を市民側から持っていく形にすれば、自由に発言出来るのかなと思う。
- 地域円卓会議のようなマルチステークホルダーが集まって意見交換する場づくりも一つの方法である。
- 自治会やコミュニティが、自分の所の特徴や欠点を理解出来る自己診断出来るシートを作ってはどうか。出来ればファシリテーターが派遣されて、議論を行い、自分たちで共有出来るような仕組みが必要ではないか。
- ・場づくりや人づくり、ファシリテーターというのはさんざんやってきて、言うほどの成果が上がっていないと思う。
- ・県の施策を横並びに書いているが、これに縦軸として一貫したプログラムを入れてはどうか。一番大事なのは話し合いをする力をつけていく経験を小さい頃から積み重ねていくこと。

<時間軸を固定せず、ライフヒストリーで見る>

- ・時間を今に固定せずに見ることが大事。今は何もしていなくても、20年前は少年野球のコーチ、その前はボーイスカウトをしていた等、ライフヒストリーの中で見れば、社会との関わりがある。今は支えられているが、30年前、40年前には支えてきた。そこを見ていく必要がある。
- ・そういう立体的な構図はわかりやすく賛成。もう一つは、将来そこを「ふるさと」にする人へのメッセージも必要だと思う。

<ふるさと意識の世代差>

- ・青少年と中高年・高齢者が持っているふるさとは違う。それぞれのふるさとはあって、それでよいのか。ここまでなら許される、という枠を作る必要があるのでは。また、他世代や他の体験を持つ人たちがどういう関わりをしていけるかをクリアにする必要がある。
- ・子どもは今のところのふれあいしか知らないが、地域の行事や伝承に触れることで、昔から繋がっているものを知ることが出来る。そういう体験は大事。
- ・経験していない世代は、知らなくて当たり前で、経験した人との意識のつなぎは果たして必要か。場合によっては世代で違ってても良いのではないか。

<青少年・大学生に期待する部分>

- ・推進施策については、青少年は忙しくて余裕が無く、経済的余裕もない。大学への期待は大きいと思いきや色々やるが、先立つものがなく、しんどい部分もある。提言に書きっぱなしにならないように、何か考えなければならない。
- ・忙しいのは青少年だけではない。その世代に応じた取組をしていかなければならない。また、少年と青年に書き分けるという方法もある。

- ・ 国の青年施策が衰退し、県もほとんどやっていないので、青年に対する対応としては県として何かいるかと思う。
- ・ 青少年を分けた方がいい。少年の場合は教育カリキュラムの中でやらなければならないが、青年層は、大学などにおいてはある程度自由がきく。そこの関わり方を分けて考えた方がよい。
- ・ 青年は団体がどれくらいあるのか、何人くらいいるのか知りたい。

<地域の実態>

- ・ 地域の活動の中で、小さい頃お世話をしていた人が大人になり、同じように地域でやってくれている。ふるさとづくりというのは、こと新たに構えるのではなくて、一部の人ではなく、地域のある程度の人と一緒にやれば残っていくものではないか。
- ・ 市で文化振興基本方策を策定した時に、委員として私が大事にしたのは文化で地域が競争するのではなく、文化で地域が共栄共存するものだということ。文化というものはみんな残すものである。
- ・ 地域づくりに一番貢献しているのが自治会。きっちり組織されている。実際に動こうと思えば、自治会を巻き込まないと駄目。
- ・ 「場の力」と言うが、良いことばかりではない。県民局域の中では伸び伸び活動出来ても、村に帰ると何も言えない状況もある。「一人ひとりが責任と役割を果たせる」とあるが、果たしたくても果たせない場合もある。こちらが果たすのではなく、果たせるコミュニティを目指すべきではないか。
- ・ ニュータウンで、隣の顔もわからない地域で、リタイヤした人たちが特技を活かし、色んなグループを作った例がある。活動に広がりが出て、まちづくり協議会などの組織を作ったので、町も補助などで応援した。

<行政の支援>

- ・ 「走る県民教室」は県の施設を2箇所以上回るという形になっているが、上久下の恐竜の里のような、地域の人が頑張っている場所もその対象に入れて頂けるとありがたい。こういうお金ではない支援の仕方もあるのではないか。
- ・ 地域は肩を組んでやりたいことがたくさんあるが、行政にはなかなか直接話しにくいと思っている地域があるので、県民局が聞いて、地域を見守って欲しい。
- ・ 今、世の中は大きく様変わりしようとしている。60代以降の人が一番多くなってきているので、その人達がやる気を出してもらわなければ困る。

<提言案の内容をメリハリのあるものにする>

- ・ 地域ごとに多様でバラバラでも良いというのは、答えにならない。最終的には地域で決めなければならないとしても、ある程度規範的な要素を盛り込んでいく必要があるのではないか。
- ・ この提言案は優等生の提言。もっと踏み込むのであれば、ちょっと偏った癖のある取組まで踏み込まなければならない。踏み込むのであれば、地域のガバナンスをどうするかという観点から、世代をどう束ねるかなど検討出来る。時間が残されていない中で

方向性をどうするか、というのはある。

- ・ 提言案の評価としてはいいと思うが、少し意識的にメリハリを付け、一言で何が言いたいか言えるものが欲しい。
- ・ 提言案は良いのですが、もうちょっと臭みがあっても良い。これを崩すのではなく、ちょっと嫌がられるくらいの頑張りがあってもいいかと思う。
- ・ ちょっと臭みを付ける、というのは、新しいコミュニティ概念を作るのだろうと思う。そこには自治の問題が出てくる。そして自治会の役割が大きいことがわかってくるので、それを含めて考えなければならない。
- ・ まちづくり基本条例、地域自治基本条例等において、ローカルガバナンスを踏まえた地域自治の制度設計の議論があって、そういう議論を地域でやるべきだし、その前提というのを、踏み込んで示せないか。
- ・ こういうメンバーで物事を決める仕組みを作るとか、全員加入を義務づけるとか、具体的なことに踏み込むことは一つだと思う。
- ・ 地域で地域の問題を解決していくための、地域自治の仕組みづくりに踏み込むのは一つ。そこに一人ひとりの自立性を埋め込んでいくこと。地域の民主主義をどう作るかというあたりを入れる。ただ、それは県がやることかどうか。
- ・ 地域が自立していくというのは綺麗事の話になるので、もっと具体的なものに降ろさなければならないのではないか。

<提言に織り込むこと、課題>

- ・ 提言は良いところをモデルにして作っている。出来ていないところや課題があるところをモデルにすると、もう少し幅広いものが作れたのでは。良いところのエキスを取ったら出来ていないところは非常にしんどい取組になる。とはいえ、事例としては良いところしか紹介しにくい。
- ・ 「話し合い」と「体験」という言葉を使うことは、綺麗事になってしまうという欠点を持つ。そこを多様な事例でフォローする。気になるのは悪い事例の扱いだが、実際は難しい面があるので、良い事例の理想を見ながら構成していくしかないかもしれない。
- ・ ソーシャルキャピタルとか、社会的密度とか、結束力が強ければ強いほど、地域内はよいが、排他的になってしまう。そこをどう突破するかがこの審議会の重要な課題。
- ・ 今回の資料は良くできていると思う。将来自分が亡くなっても、その後に生きていく人たちを活かすことを書いていかなければならない。
- ・ やらなければならない部分とやらなくても良いのに続けている部分もある。そこを見極め、声が小さい人でも真剣に耳を傾けなければならない。
- ・ 県民の幸せな生活を目指す審議会だが、何にでも効く特効薬は今の時代はない。お金がかかる事もあるので、知恵を巡らせて対応しなければならない。

(4) 県民文化局長挨拶

- ・ この審議会で県民の幸せな生活について話し合いを重ねていたにも関わらず、今年県の東部で残念な事件が起こった。

- ・ 理由を考えた時、地域のコミュニティや自治会等の活動が大切だとは思いますが、自治会長や民生委員などのなり手が無くなっている地域もある。行政からのプランが地域に降りていって、地域の負担になっている実態が浮かび上がっている。実態を行政が知りつつ、ネットワークを組んでいく大変さを実感している。
- ・ この提言を多様な意見を元にまとめさせて頂くが、私たちだけでは難しい。県民の生活に役に立つ内容にしていきたいので、是非ご協力をお願いしたい。